シンデレラになりませんか

理工学部教授　　林　　陽

『日本は言霊の幸う國である』と中学生の頃に習った記憶がある。今頃は流行らないが、賀茂眞淵や本居宣長たちが國学をしきりに鼓吹した時代にさかんにいわれた言葉で、要するに言葉とか國語とかには、ただ単にその意味だけでなく、その國民の精神、伝統などがこもっており、息づいているということで、彼らは日本語は特にそうだといいたかったのでしょう。諸君たちの使う言葉にも、それを仲間うちで使うことにより、その言葉のもつ意味に加えて、その場の雰囲気なり気持なりを十二分に伝えることができることは、諸君が平常よく感じていることであります。例えば「○○さん、茶をしばきにいこう。」

聖書の冒頭にも『はじめに言葉ありき』と書かれています。この世界が始まった時にまずあったのは言葉だというのですから物凄い話です。山でも川でもない。人や動物や草木でもない。実に言葉があったと書かれているのです。

このように洋の東西を問わず言葉が大切であるといっているのは、言葉は思想を伝え、また思考につながるからです。とにかく考えるには、日本語なり英語なり、どこかの國の言葉が必要なのです。言葉なしには冥想も出来ないし、入試の答案も書けないのです。

全く個人的な意見ですが、私は大学入試は、各学部を通じて國語だけでよいと思っています。それでは余りというならば國語に加えて英語（これは一朝一夕には習得できないのと、これも國語であるから。もちろん他の外國語でもよい）をいれれば万全です。國・英の出来る人は数学もでき、他教科は本人さえ、その気になれば幾らでも伸ばすことができます。ただ、いわゆる「現國」の入試問題は不可解なものが多すぎはしないだろうか。あれは直感で解くものだと聞いたことがあるけれども。

話が横道に逸れたが言葉（國語）ほど大切なものはないのです。何となれば、先にのべたように思考の源泉だからです。かのパスカルは『人間は考える葦である』といっていますが、人が人たる所以、他の動物と事なる所以は言葉をもち高度の思考が出来ることにあることを想いおこしてほしい。

本誌のこの号は主として新しく本学に入ってくる学生諸君を対象に配布されると聞きました。そこで、子供の頃から耳にコブが出来る程、聞いていると思うけれども、この際、国語に強くなり、語彙をふやし、言葉のもつニュアンスを知るために読書の習慣をつけるのはどうだろう。一日に一度は机の前に坐り給え。これは勉強の習慣をつけ、物事への集中力をますことにもなります。そして読書は諸君の人生を、心を、仕事を、研究を、それぞれ豊かで稔りあるものにするでしょう。

マキァヴェッリという人（私は権謀術策に長けた人として知っていましたが）が、その「君主論」執筆を友人に知らせる手紙の中に「夜がくると、家に戻る。そして書斎に入る。入る前に、泥やなにかで汚れた毎日の服を脱ぎ、官服を身に着ける。こうして礼儀をわきまえた服装に身を整えてから、古の宮廷に参上する。そこでは私は、彼らから親切に迎えられ、あの食物、私だけのための、そのために私は生をうけた食物を食すのだ。そこでの私は、恥ずかしがりもせずに彼らと話し、彼らの行為の理由を尋ねる。彼らも、人間らしさをあらわして答えてくれる。四時間というもの、全く退屈を感じない。すべての苦悩は忘れ、貧乏も怖くなくなり、死への恐怖を感じなくなる。彼らの世界に全身全霊で移り棲んでしまうからだ」（塩野七生訳）と書いています。執筆について書いているのですが、正に読書の醍醐味、良さを語っているとしても

間違いのない文章です。正にシンデレラになった気分に浸れることは請合いです。

それではつぎに来るのは何を読むかであろう。これは古典を始めとし、偉い人々がそれぞれ、読むと良い本を推薦していられるのでその中から選べば良いのですが、私も読書をすすめた責任上、最近読んだものの中から、二、三挙げることにします。

まず、斎藤泰広「レオナルド・ダ・ヴィンチの謎ー天才の素顔」（岩波書店、1,500円）です。この本を読めば、いかに生（なま）のデータ、資料が大切であるか、また、それに基づいた科学的な恣意（しい）的でない考察がどのようにされなければならないかが、ダ・ヴィンチの素顔に迫る興味とともにわかってくる名著です。理系の人にもすすめたい本です。

もっと面白い本をという人にはまず「レッドオクトーバーを追え」上・下　T・クランシー（文春文庫）と「原潜ポチョムキン撃沈」　M.ジョーセフ（新潮文庫）をあげたい。これは某社のココム違反事件が新聞紙上を賑わし、最近まで尾をひいていることで有名になった潜水艦のスクリュウ音がいかに現在の戦争で重要なことであるかを教えてくれるとともに、こゝまで書いてよいのかと思うほどエレクトロニクスの進歩が語られ、諸君を魅了することは間違いない。

つぎには「レッド・ストーム作戦発動」上・下　T・クランシー（文春文庫）および「十五時間の核戦争」上・下　W・プロクノー（ハヤカワ文庫NV）はどうでしょうか。現在、米ソの間で核弾頭の廃棄という、大変喜ばしい（といっても裏側の両者の駆引きは相当なものがあるようですが）交渉が行われ、少しずつ実現しつつあり、私のように原爆を経験したものにとっては1日も早く全廃までいってほしいと願っていますが、原爆を経験していない人に是非読んでもらいたい本です。核戦争の実態を知らせ、世界ではじめての原爆を経験した日本が非核三原則を世界の人々に訴える権利と義務をもつことがわかって頂けると思います。「ドクター・ハマー」（ダイヤモンド社、2,800円）は少し眉に唾をつけて読むべき点があるにはありますが、日本人もこの位の感覚をもつ必要を感じさせる本です。国際的な視野と感覚を養うことができるだろう。

いわゆる推理小説にはアガサ・クリスティーを始めとして山ほど出版されていますが、私はスウェーデンのヴァールー＝シューヴァル夫妻の「バルコニーの男」「サボイホテルの殺人」など（10冊既刊、いずれも角川文庫）の警視マルティン・ベックを主人公とするシリーズをすすめたい。こゝにはスウェーデンの社会・風土を背景にベックを始めとするストックホルム警視庁の面々の私生活の哀歓にも接することができる。スウェーデンの静かな中都市であるマルメのサボイホテルは鉄道の中央駅と運河に面した重厚な感じのホテルであり、私は訪ねてみたことがありますが、殺人の舞台となったそのダイニングルームは夏休みであったのは残念なことでした。このように読書は旅をも豊かにする効用をもっている。

最後に理系の啓蒙書を二冊あげて、読書のシンデレラの世界への誘いの終りとします。「十歳からの量子論」　都筑卓司（講談社、７００円）「超電導で富士山時代」　石井威望（文芸春秋、1,000円）。